

Title	文法関係と語順 : 視点理論との関連で
Author(s)	東條, 良次
Citation	Osaka Literary Review. 28 P.80-P.93
Issue Date	1989-12-20
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25523
DOI	10.18910/25523
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

文法関係と語順

視点理論との関連で

東 條 良 次

1. これまでの機能主義的な観点からの語順研究においては、主語・目的語といった文法関係が自然言語における語順に対して、どのような影響を与えているかはあまり顧みられることがなかったように思われる。これは、機能主義的な立場から見た場合の主語という概念が必ずしも明らかになっていなかったからであるが、本論文ではこの点に関して、まず主語の概念を機能的な立場から説明するため「主語明示性の仮説」とでも呼ぶべき原理を仮定する。次にこの原理に基づきつつ久野の視点理論を修正し、最後に以上の考察より得られた結論を適用することで、自然言語において主語が目的語に先行する言語の方が、目的語が主語に先行する言語よりもなぜ圧倒的に多いのかの説明を試みる。

2. まず主語の機能についてだが、機能主義的な観点からの主語についての考え方の典型的なものは久野の視点理論の中にも見いだすことができる。この理論の修正の可能性に関しては後に見ることとして、ここでは主語に関する側面のみをまず取り上げてみよう。久野はその視点理論の中で次のような視点階層を提案している。

(1) Surface Structure Empathy Hierarchy

It is easiest for the speaker to empathize with the referent of the subject; it is next easiest for him to empathize with the referent of the object; ... It is next to impossible for the speaker to empathize with the referent of the by-passive Agentive: Subject > Object > By-passive Agentive.

(Kuno and Kaburaki 1977 pp. 647-648)

これはかい摘まんで言えば、主語位置に対する共感度が一番高いというものであるが、彼らによれば(1)は(2)の原則より導かれる。

(2) Syntactic Prominence Principle

Of the people whom you are describing, give prominence to the one you are empathizing with. (*Ibid.*, p. 656)

(2)の原則によれば、我々が(視点理論的な意味において)共感している指示対象が主語になり易いのは主語が最も卓立しているからということになるが、この説明は少し漠然とし過ぎているように思われる。実際、主語位置が卓立した位置であることは、これまでもしばしば主張されてきたが、その理由についての十分な説明は与えられていないのである。本論ではこの点に関して知覚的な観点からの説明を試みる。

(3) a. John hit Mary.

(4) a. John hit Mary.

b. John hit his wife.

(5) a. John hit Mary.

b. Mary's husband hit her.

c. Mary was hit by John.

d. Mary was hit by her husband.

(久野 1978 p. 132)

久野は(3)が事象を客観的に描いているのに対し、(4)(5)の話者はそれぞれ John と Mary に共感していると主張している。しかし、話者が共感しているのが John であれ、Mary であれ、文の動詞部分は主語位置にある人物の動きを描写しているように感じられるという点に注意していただきたい。例えば(5b) *Mary's husband hit her.* を見てみよう。ここで話者は Mary に共感しているが、この文の動詞部分は John の動きを描写していると言えないだろうか。同様のことが(6)の二文についても言える。

- (6) a. Her student came up to her last week and told her that he was tired of studying with her.
 b. She went up to her teacher and told him that she was tired of studying with him. (*Ibid.* pp. 183-185)

come up to と go up to は、それぞれ目的語指向の動詞と主語指向の動詞で、前者は目的語位置に共感の焦点が置かれることを要求し、後者は主語位置に共感の焦点が置かれることを要求するが、主語位置に焦点が置かれることを求める *went up to* の *went* だけでなく、目的語に焦点が置かれることを求める *came up to* の *came* も主語の人物の行為を描写しているものであり、目的語の人物の行為を描写しているのではない。これは主語一般に共通している特性のように思われるので、注目に値する。

- (7) a. The ball flew out the window.
 b. Beth threw the ball out the window.

- (8) [Event CAUSE ([Thing BETH], [Event GO ([Thing BALL], [Path OUT WINDOW]]))]
 (Jackendoff 1983 p. 175)

Jackendoff (1983) は (7b) *Beth threw the ball out the window.* の意味表示として (8) を提案しているが、これは (7b) の認知的意味は Beth が (7a) の示す事象を引き起こしたというものだ、と彼が考えているためである。

- (9) CAUSE (S, S'): Something characterized by the statement S "causes" something characterized by the statement S' if:
 (i) HAPPEN (S)
 (ii) HAPPEN (S')
 (iii) Cause ((i), (ii).)

(Miller and Johnson-Laird 1976 p. 482)

同時に彼は (9) のような表示を統語構造との違いが大きすぎるとの理由か

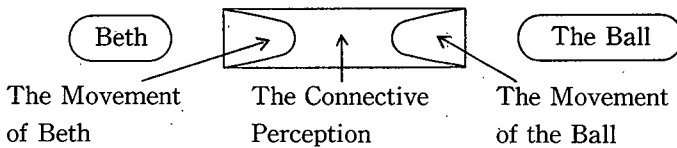
ら（つまり (9) の (i) HAPPEN (S) は事象を表すにもかかわらず、統語構造における物体表現 ((7b) で言えば Beth) に対応しているということだが) 排除している。しかしながら、Johnson-Laird の立場は Jackendoff のそれよりも知覚寄りのものなのであって、言語の意味の知覚的側面、わけても視覚的な側面を考慮に入れるなら無視できない。

そこで議論を簡単にするために、(10a) (10b) の二文について考えてみる。

- (10) a. Beth threw the ball.
b. The ball was thrown by Beth.

我々人間は、普通投げるという行為を一つの不可分な行為だと考えている。しかし、視覚の段階ではこの行為は二つの要素、(10) の例を用いて言えば、Beth の腕の動きと ball の動きとからなっている。我々は腕の動きを原因として、ball の動きを結果として見るが、これは人間の腕が ball を動かすのであって、ball が人間の腕を動かすのではないという外界についての経験的知識に基づいている。我々はこれら二つの動きを、知覚のより高い段階において、不可分のものとして結び付けているのである。この過程は無意識のうちに行われるので、人はしばしば「投げる」という不可分の行為が現実存在すると考えてしまうわけである。これを図示したのが (11) である。

(11) The Action of Throwing



Beth の動きを知覚することは Beth の存在を知覚することなしには不可能だし、ball の動きも ball それ自体を知覚することなしには知覚し得ない。このことは Beth の動きと ball の動きが、それぞれ知覚された物体としての Beth と ball に、映像上「重なって」行くと考えればわかり易い。この

関係を理解するには (12) に挙げる Alice の一節における猫とにやにや笑いとの間の関係が良い手掛かりになる。

(12) 'All right,' said the Cat ; and this time it vanished quite slowly, beginning with the end of the tail, and ending with the grin, which remained some time after the rest of it had gone.

'Well ! I've often seen a cat without a grin,' thought Alice ; 'but a grin without a cat ! It's the most curious thing I ever saw in all my life !' (Carrol, L., *Alice's Adventures in Wonderland* (Puffin Books) p. 90)

ここで Alice が驚いているのは無理もないのであって、我々の正常な世界では行為は行為者なしには存在し得ないのである。先の例における Beth の動きと ball の動きは (12) の猫のにやにや笑いに相当するということになる。

この Beth の動きに関する知覚と ball の動きに関する知覚は、より高い知覚の段階において両者を結び付ける精神作用により、不可分なものとして受容されるのである。要約すれば投げるという行為の知覚は次の三つの部分よりなる。1. Beth の動きについての知覚 2. ball の動きについての知覚 3. 両者を結び付ける、より高次の精神作用。

以上の観察に基づいて主語の機能をかなり客観的に議論することができるようになる。(10a) Beth threw the ball. においては動詞部分 *threw* は Beth の動きを描写しているのに対し、(10b) The ball was thrown by Beth. の *was thrown* は ball の動きを描写している。より正確に言えば、動詞が能動形を取っている (10a) では Beth の動きは動詞によって明示的に示され、ball の動き、ならびに Beth の動きと ball の動きの間の使役関係は動詞によって非明示的にのみ示されている。これに対し、動詞部分が受動形を取る (10b) では ball の動きのみが明示的に示され、Beth の動きならびに使役関係は非明示的にのみ示されているということになる。どちらの場合もその動きが明示的に示されているのは共に主語位置にある

項目なので、主語位置にある指示対象の動きは動詞によって明示的に示され、非主語位置にある指示対象の動きは非明示的に示されるという一般化が可能になる。

主語は非主語に比べて卓立の度合いが高いとか、文は主語について何かを述べるものであるとかいう、これまでのどこか漠然とした主張は上で述べた主語の明示性に還元できる。主語位置にある指示対象の動きのみが直接描写されているため、主語が最も卓立しているように感じられたり、文が主語についてのものであるように感じられたりするわけである。

同様の議論は(13)に示したように他の意味役割をもつ主語についても適用できる。

- (13) a. The bat damaged the door.
 b. Mary enjoyed the concert.
 c. The table has three legs.

the bat, *Mary*, *the table* はそれぞれ道具、経験者、場所の役割を担っているが、動詞部分はどれも主語の指示対象の直接的な描写であって目的語の指示対象のそれではない。

以上の考察において述べられた考えを「主語明示性の仮説」と呼ぶことにしよう。これによって、これまで極めて漠然としていた主語というものの性格がいくらかなりともはっきりした形で議論できるようになったと思う。

3. 次に、前節での成果に基づいて視点理論に修正を施すことを考える。問題なのは久野の表層構造の視点ハイアラキー(1)が少し強すぎるように思われることである。(5b)の *Mary's husband hit her.* という例を見てみよう。*Mary's* という表現は *Mary's husband* < *Mary* という関係を与えるのに対し、表層構造は *Mary's husband* (主語) > *Mary* (目的語) という関係を与え、したがって視点の一貫性の制約(14)に反することになる。

(14) The Ban on Conflicting Empathy Foci

A single sentence cannot contain logical conflict in empathy relationship. (Kuno and Kaburaki 1977 p.632)

(14) によれば非文になるはずの (5b) が容認可能なことを説明するために、久野は談話法規則違反のペナルティー (15) を提案している。

(15) 談話法規則違反のペナルティー

談話法規則に意図的に違反したときには、特殊な文（多くの場合、不適格文）が生じるが、非意図的に違反した場合には、そのようなペナルティーが無い。 (久野 1978 p.171)

(5b) *Mary's husband hit her.* は意図的に (14) に違反したものでないから、(15) によって容認可能なものとして正しく予測されるが、この文が最も無標な部類の文に属する点に注意してもらいたい。このような文をまず容認不可能としておいて、その後で別の原則によって救うのは好ましいことだろうか。好ましくないなら、このような結果をもたらした (1) を何らかの形で弱める必要があることになる。さらに (16) の例を見ていただきたい。

(16) a. The slight silken scrape of her knock-knees when she walked quickly was, I repeat, highly prized by me.

(Saul Bellow, *Humboldt's Gift*)

b. Mrs. Percival's husband was obviously bored by her and paid little attention to her, and the poor woman had managed to make no local friends.

(Agatha Christie, *A Pocket Full of Rye*)

(Kato 1979 pp.150-151)

(16a) で、表層構造の視点階層（主語 > 目的語）は、(17) の Speech-Act Participant Empathy Hierarchy によって与えられる the slight silken scrape of her knock-knees < me という関係と矛盾する。

- (17) It is easiest for the speaker to empathize with himself; it is next easiest for him to empathize with the hearer; it is most difficult for him to express more empathy with third persons than with himself or with the hearer :

(Kuno and Kaburaki 1977 p. 652)

また、(16b) の *Mrs. Percival's* という表現は *Mrs. Percival's husband* < *Mrs. Percival* という関係を与えるが、これも表層構造の視点階層に矛盾している。しかもこれらの場合、受動態は有標の構文だから意図的に違反がなされていることになり、談話法規則違反のペナルティー(15)により救うのは無理である。加えて、主語明示性の仮説の観点からも表層構造の視点階層は強すぎると言える。もし表層構造の視点階層が、主語位置にある要素の動きが動詞により明示的に示されることに由来しているなら、共感の焦点が主語になり、その動きが明示的に示されることは、望ましいことではあっても必要不可欠なこととは言えないだろう。

そこで、上に述べたような理由から、表層構造の視点階層は他の共感階層と違って「弱い」階層であると想定し、同時に構造的に決まるところからこれを S (=Structural) 階層と呼ぶことにしたい。S 階層の焦点は主語位置であり、共感階層 (以後 E (=Empathy) 階層と呼ぶ) の焦点は最も強く共感されている項である。前者は「弱い」階層であり、後者は「強い」階層である。そして、視点の一貫性の制約は強い階層相互の間には成立するが、強い階層と弱い階層の間では適用されないとしよう。

(18) *Mary's husband hit her.* (= (5b))

(19) * *Then, Mary's husband hit his wife.*

(20) ?? *Then, John's wife was hit by him.*

すると、(18) *Mary's husband hit her.* は談話法違反のペナルティーとはかわりなく文法的になり、他方 (19) * *Then, Mary's husband hit his wife.* は強い階層間に矛盾を含んでいるため非文法的になる。ところが、

こうすると (20) ?? Then, John's wife was hit by him. の容認度の低さが正しく予想できないことになってしまう。E階層の焦点である John(=him) はS階層の焦点である主語位置に来てないが、S階層は弱い階層であるため矛盾は存在しないはずである。

そこでS階層の焦点とE階層の焦点が一致している状態を望ましいと仮定し、両者が一致していない場合を望ましくないと考えてみる。望ましくないことが容認度の低さと等価でないことに注意してもらいたい。さらに Undesirable Sentence Principle (USP) を次のように規定する。

(21) Undesirable Sentence Principle (USP)

Of some cognitively synonymous sentences, use an undesirable sentence only when you have a good reason to do so.

この原則に対する違反は談話法規則に対する違反として容認度の低い文を生み出すことになる。Kato が示した例文は、この原則には違反しないので容認度は落ちない。具体的に言うと、(16a) はS階層の焦点とE階層の焦点が一致しておらず望ましくないが、E階層の焦点である me に対してよりも the slight silken scrape of her knock-knees により注意を喚起するため、話し手がその動きを明示的に示すことを考えたとしてもおかしくない。また (16b) では Mrs. Percival's husband が後の文とのつながりをよくするため主語位置におかれており、これが受動態を用いる妥当な理由となっている。¹⁾

(5c) Mary was hit by John のような文はS階層の焦点のみははっきりしてE階層の焦点は Mary, John どちらとも取れるので望ましくない文たり得ず、理由なく用いられても容認度は落ちないことになる。これに対し (20) ?? John's wife was hit by him. はS階層の焦点とE階層の焦点が別々のため望ましくない文であり、脈絡もなしに使われると理由もなく用いたことになり USP により容認度が落ちてしまうのである。

4. 最後に語順について見てみよう。久野は次のような階層を提案している。

(22) Topic Empathy Hierarchy

It is easier for the speaker to empathize with an object (e. g. person) that he has been talking about than an object that he has just introduced into the discourse for the first time.

Discourse-Topic > Discourse-Nonanaphoric

(Kuno and Kaburaki 1977 p. 654)

- (23) a. John encountered an eight-foot-tall girl on the street.
b. *An eight-foot-tall girl encountered John on the street.

(*Loc. cit.*)

久野は (23a) (23b) の容認度の違いを (22) によって説明しているが、ここでは我々の枠組で考えてみよう。(23a) の John は Discourse-Topic であって、Discourse-Nonanaphoric である an eight-foot tall girl よりも共感度が高いので E 階層の焦点である。この場合、John が S 階層の焦点である主語位置にあるため両階層の焦点は一致し、(23a) は望ましい文となり、USP に違反しない。これに対し (23b) は、二つの階層の焦点が一致しないため望ましくない文である。しかも認知的に同義な対になる文が存在し、この文を使わねばならない理由も特にないため USP 違反となる。

次に (22) を東條 (1987) で示した BN, U, I, E の四つの情報価を用いて再定式化してみよう。²⁾ Discourse-Topic は談話において既に登場しているものを指すと久野は考えているので、情報価の E に当たる。Discourse-Nonanaphoric は情報価の BN に当たるのは明らかだから (22) は (24) の様に書き換えることができる。

(24) Informational E-Hierarchy

BN < E

しかしながら、異なった先行文脈を作ってやることで (23) の John がもつ情報価は変わってくる。

(25) A: You know something about John?

B: No, what?

(26) A: You know something?

B: No, what?

(25) が (23) に先行する場合 John の情報価は E であり, (26) の場合は U である。したがって, $BN < U$ という関係も成り立つことになる。さらに, 残りの情報価と共感度の関係を見てみるため, 次のような会話を考えてみた。

(27) A: You know something about West High?

B: No, what?

a. A: The principal married Miss Green.

I U

b. A: ? Miss Green married the principal.

U I

(28) A: You know something about Miss Green?

B: No, but she teaches English at West High, doesn't she?

a. A: Yes, and she married the principal.

E I

b. A: ? Yes, and the principal married her.

I E

(27) の場合, 判定にぐらつきがあり, I と U の間には差がない可能性もあるが, 一応ここに示したとおりだとすると, これらの関係からそれぞれ $I > U$, $E > I$ という大小関係が得られ, まとめると (29) となる。

(29) Informatinal E-Hierarchy (Revised)

$BN < U < I < E$

次にこの階層を用い, 様々な言語において, 主語が目的語に先行することとその逆の場合よりも圧倒的に多い理由を考えてみよう。

- (30) SOV (e. g., Japanese)
 Taroo ga tegami o kaita.
 Taroo letter wrote.
 'Taroo wrote a letter.'
- (31) SVO (e. g., English)
 Harry hit the dog.
- (32) VSO (e. g., Welsh)
 Lladdodd y ddraig y dyn.
 killed the dragon the man
 'The dragon the killed man.'
- (Hawkins 1983 p. 1)

自然言語においては(30)～(32)に示した語順 SOV, SVO, VSO が広く見
 いだされるのに対して、(33) (34) に示す VOS, OVS は比較的希である。

- (33) VOS (e. g., Malagasay)
 Nihita ny vehivavy ny mpianatra.
 saw the woman the student
 'The student saw the woman.'
- (34) OVS (e. g., Hirkaryana)
 Toto yonove kamara.
 man he-ate-him jaguar
 'The jaguar ate the man.'
- (*Loc. cit.*)

既に見たとおり情報的に古い指示対象ほど共感度は高く、共感度の高い
 要素ほど主語位置に来やすいので、情報的に古い指示対象ほど主語位置に
 来やすいということになる。しかし、主語明示性の仮説に基づいた枠組と
 は異なり、旧情報と主語を結び付けるに際して、例えば主語は文頭にある
 から卓立しており、したがって、(2)のような原則に基づいて、共感度の
 高い要素が来るという形で主語と共感度の高い要素を結び付けようとする

枠組では、主語が目的語に先行することが一般的である事実を視点理論を用いて説明することはできない。なぜなら主語と共感度の高い要素との結び付きは主語が目的語に先行することを前提としているため、循環論に陥ってしまうからである。また、このような議論は主語が文頭に来ない言語には適用できない。

しかし、主語明示性に基づいた説明では、主語の卓立性を説明するのに主語が文頭に来ることは全く前提とする必要がない。E階層の焦点である旧情報を担う要素とS階層の焦点である主語とが一致し易いことから、旧情報と主語の結び付きが導かれる。さらに旧情報を担う要素が新情報を担う要素に先行する傾向があることから、旧情報を担う主語は新情報を担う非主語に先行するということになり、多くの言語において主語が目的語に先行する理由の説明が可能になるのである。

注

1) (22) のような原則が言語学的に有効であるためには受動態のような有標構文の機能が明確にされていなければならないのは言うまでもない。したがって、このような側面に関する研究が望まれるが、本論から離れることになるので詳しくは触れないでおく。

2) 東條(1987)では名詞の指示物がもつ心理的な地位に基づいて付与される情報価として次に示す四つを提案した。詳しくは東條(1987)を参照のこと。

BN... 知られていない

U... 知られてはいるが、意識されていない

I... 意識されている実体、あるいは他の推定可能な実体から推定できる

E... 意識されている

参 考 文 献

Hawkins, J. (1983), *Word Order Universals*, Academic Press.

Jackendoff, R. (1983), *Semantics and Cognition*, The MIT Press.

Kato, K. (1979), "Empathy and Passive Resistance," *Linguistic Inquiry* 10. 1.

久野 暉 (1978) 『談話の文法』大修館。

Kuno, S. and E. Kaburaki. (1977), "Empathy and Syntax," *Linguistic Inquiry* 8. 4.

Li, C. N. (ed.) (1976), *Subject and Topic*, Academic Press.

Miller, G. and P. Johnson-Laird. (1976), *Language and Perception*,
Cambridge: Harvard University Press.

東條良次 (1987) 「情報価付与と修正関係」 *Osaka Literary Review* 25, 1-12.